



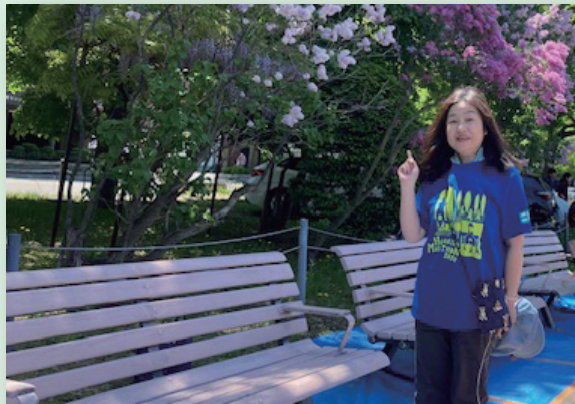
●札幌景観色で公園のベンチを塗装

札幌の中心に東西に広がる大通公園は、テレビ塔を起点に、西1丁目から西12丁目まであり、冬は雪まつり、他の季節にも各種イベントがあり市民の憩いの場になっています。それぞれの区画にはベンチが設置されており5年に一度市民ボランティアの手で色の塗装を行っています。春は西12丁目の44基のベンチの塗装が行われました。

ボランティアですが、札幌景観70色の中から3色提案させていただき、周囲の景観に配慮し「カフェオレ」色を選定しました。

その1色が自分の選んだ色で塗られているのは誇らしいことです。

この色彩提案については札幌市が予算化していないことは残念ですが残りのベンチの色も実行委員と協力し楽しく素敵に提案していきたいと思います。
(昆野照美)



源氏物語の色 -51 「宿木」

匂宮が六の君と婚約し、懐妊している中の君の不安は強い。薫は、昔、亡き大君が勧めた中の君との結婚を大君への恋慕から断り、匂宮と結びつけたことを悔やみ、中の君への執着を強める。中の君は自身への想いをそらすために姉の大君に似る浮舟（うきふね）という異母妹がいることを薫に打ち明ける。

二十六歳の年の春二月、薫は帝の意向に従い女二の宮と結婚した。帝の婿として世人から羨望されるが、当の本人は気の進まぬ結婚に思い悩み大君への想いを抱き続けていた。

夏四月、宇治を訪れた薫は、田舎風の一行と偶然、出会い、その中に浮舟の姿を垣間みた。頭のかたち、ほっそりとした姿、上品な様子は亡き大君の生き写しの様で、「濃き桂（うちぎ）に、撫子とおぼしき細長、若苗色の小桂」という衣装をまとっていたと描かれている。“濃き”は“濃き紫”を指す場合が多いが、“紅”を指す場合も有り、浮舟の身分からこの場面ではより高価な紫根染による紫ではなく“濃き紅”であろうと推測する。

薫はこの出会いに感動し、以前より仲介を依頼してきた尼君を通して、浮舟に対面したい旨を伝えたところでこの帖は終わり、続く展開へ期待を抱かせる。
(平山和香子)

●万葉集のなかの色 -10

龍の馬も 今も得てしか あおによし
奈良の都に 行きてこむ為

大伴卿旅人 (巻5-806)

奈良の枕詞である「あおによし」が使われて、青と丹で奈良の都の色彩的な美しさを表現している。

現には 逢うよしも無し ぬばたまの
夜の夢にを 継ぎて 見えこそ

大伴卿旅人 (巻5-807)

「ぬばたま」は黒玉と書き、黒いヒオウギの種子。黒の色名としても使われる。

梅の花 咲きたる園の 青柳は
かづらにすべく 成りにけらずや

小式粟田太夫 (巻5-817)

松浦川 川の瀬早み 紅の
裳の裾濡れて 鮎か釣るらむ

大伴卿旅人 (巻5-861)

山高み 白木綿花に 落ち激つ
滝の河内は 見れど飽かぬかも

笠朝臣金村 (巻6-909)

わが恋心は川霧に包まれ晴れないと。

茜さす 日並べなくに わが恋は
吉野の川の 霧に立ちつつ

在る本の歌 (巻6-916)

* 講談社文庫・中西進・万葉集から (永田泰弘)